教育研究実践報告誌
2021.3 第 4 巻第 2 号 pp.46-53

保育の専門コースを擁する高等学校の「今後の方向性」とその課題

―卒業生調査の分析を通して―

三　沢　大　樹

要旨：高等学校保育コースの卒業生を対象とした「高校時代の学習に対する思いや高校卒業後の進路及び現在の就業等」の追跡調査を行った。対象者は研究実践校の卒業生（2016 年 3 月卒業，2017 年 3 月卒業）の計 40 名で，回答率は 42.5%であった。分析の結果，高校卒業後に保育を専門とする大学等に進学した対象者は，保育士養成施設の養成卒業生全般と比較して同程度或いは高い割合で保育専門職・福祉専門職に就職していることが明らかとなった。また，高校在学中に取得した保育技術検定に関して，保育の学習に対する取り組み，家庭や地域で営まれる保育，保育技術の定着（進学先での学修），進路決定の各場面で「役立ち感」を覚えており，進学や就職の場面では異なること，〈家庭看護技術〉〈言語表現技術〉の 2 種目に関しては具体的な記述が少ないこと等から，生徒がより主体的に学習に取り組める学習内容や教材の開発，検定内容自体の見直し等の改善が必要という結論に至った。

キーワード：高等学校保育コース，卒業生調査，全国高等学校家庭科保育技術検定，
キャリア形成，高大接続

1. はじめに（研究の背景）

我が国の高等学校（特に専門高校）の一部には，保育の専門学科等（以下，保育コース）が設置されており，将来保育職を目指す高校生を対象に専門的な学習が展開されている。筆者はこれまでに，高大連携・接続事業の一環として [1)]，保育コースで実施した指導実践の内容と成果の報告や，新高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）で整理統合された保育に関する科目群と「全国高等学校家庭科保育技術検定（以下，保育技術検定）」との関連性，並びに今後の課題等について論じてきた [2)]。

研究実践校の函館大妻高等学校（以下，研究実践校）は，北海道函館市に所在する私立の女子高校で，2013 年度より家政科の中に子ども文化コース（保育コース）を設置している。筆者は 2014 年度から 2016 年度までの 3 年間，同校の家庭科教諭らと共に本コースの授業（「子ども文化演習」）を担当し，音楽表現の授業実践を行った。また，本コースでは保育技術検定 1 級に合格することを到達目標としており，教育課程全体を通して検定合格に向けた学習支援を行っている。その他，全国の保育コースで展開されている学習内容や活動が，保育士や幼稚園教諭等の保育に関連する職業と綿密に関わっていることは想像に難くない。一方で，制度上，現在の保育コースでは保育に関する国家資格や免許等の取得が不可能であるため，卒業後に保育を専門とする大学等に進学し，資格・免許を取得して初めて正式な保育職に就くことが可能となる。つまり，保育コースは他の分野の専門高校（職業教育を主とする学科）とは事情が異なり，卒業生が進学先の大学等を卒業し

て就職する段階に至ってから，初めて学習の成果や特にキャリア形成及び就業への影響（保育専門職に就くことを選択したか否か）の検証が可能となる。

この度筆者は，研究実践校の卒業生を対象者として，高校時代の学習に対する思いや現在の就業等に関する追跡調査を実施した。本研究では，この卒業生調査の結果を「キャリア形成」と「保育技術検定」の観点から分析することを通して，保育コースの今後の方向性を探求するための基礎的な資料を得ることを目的とする。

2. 方法

研究実践校の子ども文化コース卒業生を対象者として，高校時代の学習に対する思いや高校卒業後の進路及び現在の就業等に関する追跡調査を実施した。調査対象は，2016 年 3 月卒業の子ども文化コース 1 回生（24 名）並びに 2017 年 3 月卒業の 2 回生（16 名）の計 40 名である。2 年制短期大学等への進学者が多いことを，高校卒業の段階である程度把握していたことから，調査時期は対象者の多くが社会人 1 年目に該当する高校卒業後 3 年経過した段階で実施した。調査項目は以下の 7 項目で，一部の項目は高校卒業後の進路別に回答の対象者を限定した。なお，項目④の細目に関しては，亀井（2008）の先行研究を参考にした。先行研究では，全国高等学校家庭科教育振興会が主催する全国高等学校家庭科技術検定のうち，被服製作検定と食物調理検定に限定して調査を行っており，この二つの検定に於ける技術の習得と役立ち感の実態を把握し，それを踏まえて望ましい技術検定の在り方と高等学校家庭科カリキュラムの中での位置付けを明確化することを目的としている。調査対象は，検定取得の卒業生（検定既得者），検定取得途中の在校生，並びに指導者という比較的大規模な調査で，質問紙調査及び指導者に対してはインタビュー調査を実施している。研究成果として「主体的な生活を自信を持って創造するためには，基本的な知識とともに生活技術の修得が必要である」ことが概ね検証されたことを報告している。

その他，調査概要は以下に示す通りである。

調査期間：2018 年 10 月（1 回生），2019 年 6 月（2 回生）
調査方法：質問紙による郵送調査と Microsoft Forms による Web 調査を併用
調査項目：①高等学校卒業後の進路とその理由
②子ども文化コースの学習で印象に残っている内容，学習内容に対する意見
③在学時に取得した保育技術検定の級
④保育技術検定に対する「進路決定や職業生活，家庭生活や地域社会に於ける役立ち感」（3 件法）
⑤保育技術検定（4 種目）で獲得した技術が大学等の学修に与えた影響等
⑥大学等で資格・免許等の取得状況（見込みを含む）
⑦属性調査（現在の就業状況を含む）

倫理的配慮として，研究目的と調査方法の概要，結果の処理方法及び成果の回答者へのフィードバックの方法，プライバシーの保護に関する事項，研究協力の任意性及び協力

しないことによる不利益が生じないことを書面及び設問の導入部分で説明し，回答の返答を以て調査同意が得られたこととした。また，本稿では紙面の都合上，調査項目の中から卒業生の保育専門職への就業状況と，在学中に取得した保育技術検定の成果としての「役立ち感」等を中心に報告を行う。

3. 結果と考察

今回の調査では，1 回生 9 名，2 回生 8 名の計 17 名（42.5%）から回答を得ることができた。高校卒業後の進路を確認したところ，保育を専門とする大学等へ進学した者は 12 名（70.6%）で，その内訳は短期大学 10 名，専門学校 2 名である。回答日現在で 8 名が既に進学先を卒業しており，他は在学中 2 名，中途退学者 1 名，不明（無回答）1 名であった。保育を専門とする大学等に進学をしなかった者は 5 名（29.4%）で，高校卒業後の進路は就職 3 名，保育を専門とする学部等以外への進学者 1 名，不明（無回答）1 名であった。分析に際して，保育を専門とする大学等への進学者を進学者群，保育を専門とする学部等以外への進学者を含む就職者等を非進学者群と定義する。以下，本章では卒業生の就業等の状況（回答日現在）及び保育技術検定に対する「進路決定や職業生活，家庭生活や地域社会に於ける『役立ち感』」の様相，並びに「保育技術検定で獲得した技術と進学先の大学等の学修との関係」に対する記述の特徴（進学者群のみ回答）を保育技術検定 4 種目（音楽・リズム表現技術，造形表現技術，家庭看護技術，言語表現技術）の別に概観していく。また，記述の特徴に関しては原文のまま表記することを基本とし，明らかな誤記が認められる場合には，筆者が加筆修正を行った。

3.1　現在の就業等の状況

図 1 は，保育コース卒業生の現在の就業等の状況の割合を示したものである。この図を見ると，保育専門職に就業中の者は 41.2%（7 名），保育と関係が深い職業である福祉専門職の者は 11.8%（2 名）であることが分かる。また，進学先を既に卒者している 8 名に関して就業状況の内訳を確認したところ，保育士 37.5%（3 名），幼稚園教諭 12.5%（1 名），認定こども園の保育教諭が 12.5％（1 名），保育士や幼稚園教諭・保育教諭以外の保育専門職が 25.0%（2 名），福祉の専門職が 12.5%（1 名）であった。全国保育士養成協議会（2020）によると，「指定保育士養成施設養成卒業者の内定等に関する調査」の結果報告の中で，令和元年度卒業予定者の就職決定先もしくは就職希望先について，保育専門職（報告では児童養護施設・障碍者支援施設・老人福祉施設を含めて「保育職」と定義）の回答は 85.9%，短期大学・専門学校の卒業予定者に限定した場合 91.4%であったことが明らかとなっている。このことから，保育コース卒業生の保育専門職・福祉専門職への就業率は，近年の保育士養成施設の養成卒業生の全般と比較して同程度或いはそれ以上の高いものであることが分かる。 また，福祉専門職に就業中の中の 1 名は，高校卒業後の進路で就職を選択した者であった。

以上から，保育を専門とする大学等に進学した保育コース卒業生は，進学先の卒業を経て保育専門職に就業している割合は非常に高いこと，保育専門職に就業していない者に関しても，福祉専門職という保育と関係が深い職業に就業していることが確認された。ま

た，少数ではあるものの，高校卒業の段階で保育系の大学等への進学以外の進路を選択した者の中にも，その後のキャリア形成の中で，福祉専門職に就業している者もいることが，今回の調査で確認された。

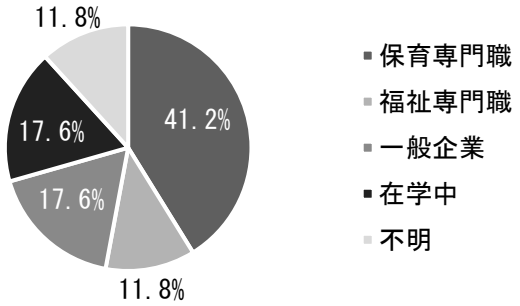

図 1　保育コース卒業生の就業等の状況（回答日現在） n=17

3.2　保育技術検定に対する「役立ち感」の様相

この調査項目には 15 名（88.2%）から有効回答を得ることができた。表 1 は，各細目の評価の平均値を進学者群，非進学者群，並びに全体の別に示したものである。この表を見ると，全ての細目で進学者群の評価が非進学者群の評価よりも高く，平均値では 0.6 ポイントもの差が確認される。このことから，進学者群の方が非進学群よりも保育技術検定に対して相対的に「役立ち感」を覚えていることは明らかである。

次に細目別に確認すると，①保育の学習に対する取り組み，②家庭や地域での保育の営みに対する取り組み，⑥自身の進路決定の 3 点に於いて両群の平均値の差が大きく，特に①と⑥に関しては，進学者群の平均値が 2.9 ポイントとほぼ全員が「役立ち感」を感じていることが分かる。また，③保育技術の定着(1)進学先等での学習に対して（進学者群のみ該当）の平均値も 2.6 ポイントと高い。進学者群で平均値の低いものは，⑦校内推薦等の資料として，⑧進路や就職の際に評価された，⑨進学や就職の際に面接等で話題になった，の 3 点である。非進学者群では平均値 2.0 ポイントの細目が多く，全般に中庸的な評価が窺えるものの，⑨進学や就職の際に面接等で話題になった，⑩自分に自信がついた，の 2 点に関しては他の細目よりも平均値が高く，「役立ち感」を感じている者もいることが推察される。

以上の結果から，保育技術検定に対する様々な場面での「役立ち感」に関して，進学者群の方が非進学者群よりも全体として高く評価していることが明らかとなった。特に保育の学習に対する意欲，家庭や地域で営まれる保育，保育技術に関する進学先での学修，進路決定の各場面に於いて進学者群からの評価は高く，その一方で，進学や就職活動の場面に関しては，肯定的な評価をしていない者もある程度存在することが分かった。非進学者群に関しては，回答者数が僅か 4 名であり今回の結果を以て全体の傾向を判断する段階では無いものの，中庸的な評価をした者が多い中で，就職面接の場面や自分に自信を持つきっかけとして，検定の「役立ち感」を挙げる者がいることも確認された。

表 1　保育技術検定に対する「役立ち感」(3 件法)

細目	進学者 n=11	非進学者 n=4	全体 n=15
①保育の学習に対する取り組み	2.9	2.0	2.7
②家庭や地域での保育の営みに対する取り組み	2.7	2.0	2.5
③保育技術の定着（1）進学先での学修に対して	2.6	―	―
④保育技術の定着（2）家庭や地域の保育の営みに対して	2.5	2.0	2.4
⑤保育技術の定着（3）現在の職業に対して	2.5	2.0	2.4
⑥自身の進路決定	2.9	2.0	2.7
⑦校内推薦等の資料として	2.4	2.0	2.3
⑧進学や就職の際に評価された	2.4	2.0	2.3
⑨進学や就職の際に面接等で話題になった	2.4	2.3	2.3
⑩自分に自信がついた	2.5	2.3	2.5
平均値	2.6	2.3	2.5

3.3　保育技術検定で獲得した技術と大学等での学修との関係

3.3.1　音楽・リズム表現技術

音楽・リズム表現技術に関しては，進学者群 12 名のうち 9 名から有効回答を得ることができた。具体的な記述内容を確認すると，「ピアノの授業に役立った」「入学してからピアノの学習を始める学生たちよりもピアノを弾くことができる」「知っている歌が多く役立った」「実習の時や授業で歌ったりピアノを弾いたりすることがあったので，高校時代に授業を受けていた事で大学でも役立ちました」「保育実習での歌唱指導に役立った」等の，高校時代に習得したピアノや歌唱の演奏技術が，大学等の授業や保育実習・教育実習の場面で役に立ったとする肯定的な意見が多く確認された。また少数ではあるが「声楽は体を使って行っていた（大学では)」といった，指導方法の違いを指摘する記述も確認された。

3.3.2　造形表現技術

造形表現技術に関しては，進学者群 12 名のうち 7 名から有効回答を得ることができた。〈音楽・リズム表現技術〉と同様に，大学等の授業や保育実習・教育実習の場面に関する意見が多い。具体的な記述内容を確認すると，「実習での一日保育に役立ちました」「実習の時に折り紙を他の人より多く子供に教えることができました」「美術の授業で役立った」等の肯定的な意見の他に，「大学では折り紙の学修は行わなかった」等の，学習内容の違いを具体的に指摘する意見も確認された。また，少数意見ではあるが「短大では造形の授業を受けたという記憶が余りないのですが，検定合格を通して学ぶことが出来たので，苦手ながらも私も少しはできるという自信に繋げることができたと思います」という，保育技術検定の合格に向けた努力のプロセスに対する肯定的な意見の記述も確認された。

3.3.3　家庭看護技術

家庭看護技術に関しては，無回答者が多いものの，6 名から有効回答を得ることができた。具体的な記述内容を確認すると，「保育実習で役に立つ」「出血などの対応に役立つ」「実習でオムツ交換やミルクを飲ませる事があったので，検定で行ったことが役立ちました」という保育実習や教育実習で役に立ったとする肯定的な意見と，「布おむつは使っていないので余り役立たなかった。包帯も保育現場では余り使われていない」「大学の授業

では，沐浴などの実践的な実習をした」といった，保育技術検定を通して獲得した知識や技術と実際の保育現場で必要とされる知識や技術，或いは大学等での学修との違いを訴える記述が確認された。

3.3.4　言語表現技術

言語表現技術に関しても，無回答者が多いものの，6 名から有効回答を得ることが出来た。具体的な記述内容を確認すると，「絵本の持ち方などが保育現場に出てから役立っている」「絵本の読み聞かせに役立つ」「絵本の読み方を他の先生方から褒められる」「絵本，紙芝居の読み方や持ち方，捲り方など細かいところまで検定で実践した事により，実際の実習では子供たちを前にしても動じずに進めることが出来ました」といった，保育実習や教育実習の場面や，保育職として就職した現在に於いて，読み聞かせの知識や技術が役立っているという肯定的な意見が多い。また，少数意見ではあるが「大学では絵本よりもパネルシアター等を行っていた」といった，学習内容の発展的な違いを指摘する記述も確認された。

4. まとめと今後の課題

この度，保育コースの今後の方向性を探求するための基礎的な資料を得ることを目的として，研究実践校の卒業生を対象に追跡調査を実施した。その結果，保育コース卒業生の保育専門職・福祉専門職への就業率は，近年の保育士養成施設の養成卒業生全般と比較して同程度或いはそれ以上の高い割合であることが明らかとなった。在学中に取り組んだ保育技術検定に対しては，進学者群の方が非進学群よりも相対的に「役立ち感」を覚えていること，特に保育の学習に対する取り組み，家庭や地域で営まれる保育，進路決定の場面に於いて，進学者群の覚える「役立ち感」は非進学者群のものよりも高く，保育技術に関する進学先での学修の場面でも「役立ち感」を覚えている者が多いことが明らかとなった。これは，高校卒業後の進学先に於いてキャリア形成を育む中で，保育技術検定合格に向けた学習経験が有用に機能していることを示唆するものである。一方で，進学や就職活動の場面に対する評価は，他の細目と比較すると若干下回る結果を示した。ここから，保育技術検定に関して，現状ではその制度や内容の実態等が保育現場や保育者養成課程の大学等に十分に周知されておらず，検定の合格者が進学や就職活動の場面で十分な評価を受けられる段階には無いこと，或いは十分な評価を受けられないと卒業生が感じていることが推察される。保育技術検定で獲得した技術と大学等での学修との関係について，具体的に挙げられた記述内容を種目別に確認したところ，〈音楽・リズム表現技術〉〈造形表現技術〉に関しては，検定を通して習得した技術が，大学等の授業や保育実習・教育実習の場面で役に立ったとする肯定的な意見が多く，一部には指導方法や学修内容の違いを指摘する記述も確認された。〈家庭看護技術〉に関しては，保育実習・教育実習の場面に対する意見が多く，肯定的な意見と，実際の保育現場で必要とされる知識や技術との違いを指摘する意見との両方が確認された。また〈言語表現技術〉に関しては，読み聞かせの知識や技術が，保育実習や教育実習の場面の他，現在保育職として活用されている等の肯定的な意見が多く確認された。一方で，〈家庭看護技術〉と〈言語表現技術〉の設問に対して，対象者の半数が無回答であったことは些か気掛かりである。紙面の都合上，本稿の中では報告

することが出来なかったが，進学者群が高校在学中に取得した保育技術検定の級を種目別に確認したところ，〈家庭看護技術〉〈言語表現技術〉が他の 2 種目よりも劣ることは無く，意見が少ない理由が技術的な未熟さに起因するものとは考え難い。研究実践校では，高大連携・接続事業の一環として，筆者ら短大教員（当時）が音楽表現及び造形表現分野の授業実践を行っていたことから，〈音楽・リズム表現技術〉〈造形表現技術〉の印象が他と比べて若干強いものとなることは否定できないが，〈家庭看護技術〉〈言語表現技術〉に関しても，高校側では適切なカリキュラムの下に学習が行われ，検定試験が実施されてきた筈である。生徒の資質や能力を起因とする得手不得手や，好き嫌いが発生することとは別問題として，対象者の声として多くの意見が上がっていないことは，今後に課題を残すものであろう。これら 2 種目に関しては，検定試験合格を目指す高校生が主体的に学習に取り組めるような工夫が必要であり，授業内容や教材の開発，そして何よりも現在の保育現場で必要とされる知識や技術と繋がる検定試験となるよう，出題内容や方法を見直して改善を図ることを提案したい。

今回の調査では，一つの高校の卒業生を対象としており，また回答数も少ないという調査上の不手際から十分な分析ができなかったが，当初の目的である，方向性を検討するための基礎的な資料として，ある程度の意味を成す情報が得られたと思われる。調査方法に関しては，他の卒業生調査を参考とする等，今後は分析に十分な回答数が得られるよう再検討をしたい。

註

1) 筆者の前任校の函館短期大学保育学科と，研究実践校の函館大妻高等学校による教員レベルでの連携事業である。

2) 筆者らによる指導実践及び保育技術検定に関する詳細，並びにこれまでの研究成果に関しては，三沢・髙橋・安川（2017），三沢（2019）等を参照のこと。

謝辞

本調査の実施にあたり，多大なるご協力を頂いた函館大妻高等学校家政科子ども文化コースの卒業生と教職員の皆さまに，厚く御礼申し上げます。

付記

本稿は，国際幼児教育学会第 40 回大会（於：ハワイコミュニティカレッジ・ヒロ校）に於いて発表した内容を基に，データの追加と修正及び新たな検討を加えて再構築したものである。

参考文献

亀井佑子（2008）． 高等学校家庭科技術検定の実態と望ましい方向性の追求　日本家庭科教育学会誌，*51*(2)，139-140.

保育士養成協議会（2020）．指定保育士養成施設卒業者の内定等に関する調査研究研究報告書　一般社団法人保育士養成協議会　Retrieved from http://www.hoyokyo.or.jp/R2report.pdf（2021 年 2 月 25 日）

三沢大樹（2019）．保育の専門コースを擁する高等学校に於ける保育技術検定導入とその課題　常葉大学教育学部紀要，*39*，361-369

三沢大樹・髙橋セリカ・安川実穂（2017）．保育の専門コースを擁する高等学校に於ける音楽表現の授業実践報告　常葉大学教育学部紀要，*38*，215-226